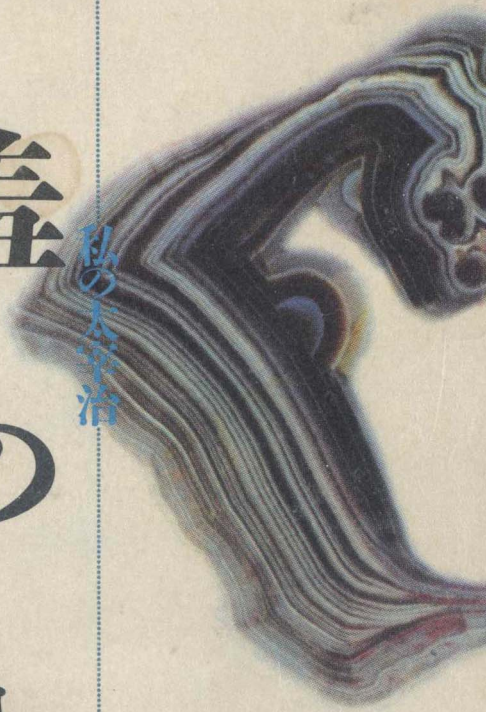
合羞の人

秋山太郎治



含羞の人

矢代静一 私の太宰治

河出書房新社

含羞の人——私の太宰治

矢代静一

⊙初版発行一九八六年五月三〇日⊙発行者清水勝⊙発行所株式会社河出書房新社東京都渋谷区千駄ヶ谷二—三二—二電話〇三—四〇四—一二〇一振替口座東京〇—一〇八〇二⊙印刷大日本印刷株式会社⊙製本株式会社若林製本工場⊙©1986 Printed in Japan⊙乱丁・落丁本はお取替えいたします⊙ISBN 4-309-00433-4

目次

第一章　含羞のために死す――信天翁……7
第二章　惚れたが悪いか――カチカチ山……22
第三章　猫だって鳩だって鳴いてる――新ハムレット……38
第四章　吉か凶か――メリイクリスマス……55
第五章　タンポポの花一輪でも恥じずに――葉桜と魔笛……71
第六章　M・C（マイ・チェーホフ、マイ・チャイルド、マイ・コメディアン）――斜陽……88
第七章　稲妻・あー　こはー　よせやい――チャンス……104
第八章　身と霊魂（たましい）をゲヘナにて……――トカトントン……120
第九章　あこがれの桃源郷もばかばかしい冬の花火さ――冬の花火……136

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第十章　あやまちを犯した女は優しい――書簡……152
第十一章　あはれ　わが歌　虚栄にはじまり……――走り書……166
第十二章　あなたを待っていたのじゃない――春の枯葉……181
第十三章　威張るな！　――親友交歓……196
第十四章　子供よりも親が大事――桜桃……212
第十五章　私ひとり、黄昏の海――海……228
第十六章　無憂無風の情態――津軽……244
終章　お茶のあぶくにきれいに私の顔が――葉……261
あとがき……274
参考文献……276

含羞の人

——私の太宰治

第一章・含羞のために死す――信天翁

この間、俳優の東野英治郎に会ったら、「あのころの君は、太宰の『信天翁（あほうどり）』なんか、むさぼるように読んでいて、ませた少年だと思ったよ」と、なつかしそうだった。

あのころというのは、終戦間近の昭和二十年の早春のことで、私は十八歳だった。俳優座の移動演劇隊である芙蓉隊に属していて、御殿場にあった女優東山千栄子の別荘を根城にして、農村慰問のために村から村へと、所謂ドサ廻りをつづけていた。出し物の一つに「みんな手を貸せ芋が行く」という芝居があり、お国のために、戦争に勝つために、お芋を増産しようという国策宣伝劇であった。作者は、女優栗原小巻の父の栗原一登。私は、主役の「芋」で、褐色の酒袋でこしらえた縫ぐるみのサツマ芋の衣裳をすっぽりかぶり、舞台をところ狭しと駆けずり廻ったものだ。他の登場人物は東野を始めとしてみな農民で、いろいろと台詞をしゃべったが、リアリズム劇だったから、「芋」役には台詞は一つもなかった。つまり主役とは名ばかり

であったから、毎日の舞台は空しく、それにそのころは、もう誰の目にも日本の敗北は明らかだったので、演じる方も観る方も、もう一つ盛り上らなかった。田舎の小学校の校庭に設けられた仮設舞台で、「芋」を演じ終ると、私は、楽屋に早変りした宿直室に戻り、次の出し物が始まるまでの幕間に、寝ころんで『信天翁』を読みふけった。

私は早稲田第二高等学院の学生だったが、休学届を出して、俳優座の研究生になっていた。役者としては新米もいいところで、このドサ廻りが初舞台だったと思う。従って、大先輩にあたる東野は、この公演で初めて知りあったようなものだし、「芋」のような単純な役を嬉々として（よそ目にはそう見えた）演じている役者志望の十八歳の少年の読んでいる本が、「信天翁」と分ったとき、東野が奇異に感じたのは当然であろう。

そのころの太宰は、戦後から現在にいたるまでのようにあまねく知れ渡っていなかった。文学好きの一部の読者が愛読していたに過ぎない。しかし、彼等の殆どは熱狂的で、とりわけ文学少年や文学青年の間での傾倒ぶりは、まことに、ファンと呼ぶのにふさわしかった。

月　日。

恥かしくて恥かしくてたまらぬことの、そのまんまんなかを、家人は、むざうさに、言ひ刺した。飛びあがつた。下駄はいて線路！　一瞬間、仁王立ち。七輪蹴つた。バケツ蹴

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

飛ばした。四畳半に来て、鉄瓶障子に。障子のガラスが音たてた。ちやぶ台蹴つた。壁に醤油。茶わんと皿。私の身がはりになつたのだ。これだけ、こはさなければ、私は生きて居られなかつた。後悔なし。

月　日。

五尺七寸の毛むくぢやら。含羞のために死す。そんな文句を思ひ浮かべ、ひとりでくすくす笑つた。（「悶悶日記」）

随想集『信天翁』が昭南書房から刊行されたのは昭和十七年で、昭和十一年から昭和十五年までのエッセイの中から主だったものが選ばれている。「悶悶日記」は入っていない。だから引用した。昭和十一年六月の「文藝」に発表されたもので、太宰が二十八歳のときだ。この年は第一短篇小説集『晩年』が砂子屋書房から刊行され、芥川賞に落ち、バビナール中毒症状がひどくなっている。前年には縊死自殺をはかっている。

こういった背景を当時の私が知っていたかどうかは定かではないが、多分、知っていたと思う。知っていなくても、この諧謔調のリズミカルでユニークな文体の行間に、屈折した哀しみが隠されていることを読み取ったのは確実である。私は都会育ちの感受性の強い文学少年だったから。まして、戦争中の無味乾燥な、硬派ばかりが幅をきかせていた、「文化」の「ブ」の字

も消えてしまった時代だ。当時のはやり言葉で言うなら、「軟弱な」太宰の精神に、平均的日本人とは逆に激しく共感したのは当然だった。

私は、太宰の戦争中に刊行された初期の作品群を、古本屋で買い求め、何度、繰り返し読んだことか。

ここに終戦後の昭和二十一年六月三日付の私の古日記がある。

断髪、人生修業の一つか、涙流して訣別の触覚、青い穹仰いで無性にくやしく、会ふ人〳〵に、己、進んで散髪の弁、淋しききはみ、極まりののちの無神経、脱皮せよ思春の想ひ、精神に惚れてくれと曳かれものの小唄、生れてすみません、ふきとばせしやぼん玉、ええいと気合もろとも、あはれ十七の美少年泣き伏すの図。

書き写しながら、はずかしさでいっぱいになった。完全に太宰の文体の猿真似である。「生れてすみません、ふきとばせしやぼん玉」は、太宰の名台詞だ。それどころか、くわしく調べたら、殆どが太宰の文章の無断借用かも知れない。

「断髪」について思い出した。戦争が終り、私はやっと髪を伸ばし始めた。ところが、俳優座で、翌二十二年に、真船豊の「中橋公館」という戯曲を上演することになった。私には、春夫

という少年の役がついた。戦争中の話なので、丸坊主でなければリアリティがない。演出の千田是也が、髪を刈れと私に命じたわけだ。そのころ、私は、渋谷の道玄坂の屋台のオデン屋の看板娘に惚れていた。そこで、「精神に惚れてくれ」ということになったのであろう。その年、私は十九歳なのに十七歳と記してあるのは、それこそ「含羞」に違いない。

いまなら、イガグリ頭になろうが、ふさふさした髪でいようがたいしたことではないが、思春期の少年にとっては深刻な事件だった。けれど、他人が見たら、こんなことで悩むのは滑稽である。人に訴えられる悩みではない。そんなとき、太宰の文体で、心のもやもやを綴ると、不思議に、心が安まるのであった。そう言った意味で、太宰は便利な存在だった。

私に限らず同世代の作家には、その青少年時代に、太宰に魅せられた者が多い。

たとえば、北杜夫は私と同じ昭和二年生れだが、『どくとるマンボウ青春記』の中で次のように回想している。抜粋してみよう。

（旧制松本高校の）一年生の冬に、太宰治を読んだとき、ずるずるとそれにひきつけられていった。ある種の抵抗を覚えながらも、いつの間にか文章がそっくりになってゆくのが不思議なくらいだった。太宰に似た弱さ、その甘えは私も十分に持ち合せていた。なによりも知らず知らず青少年どもを自分がその唯一の読者であると思いこませるところは、滅多にな

いけしからぬ術だと今でも思う。

そのあと、辻邦生宛に出した手紙を紹介している。

秀才、ふと顔をあげ、「君は気楽でいいね」。この言葉、決して皮肉や嘲笑でなく、それこそ天真ランマン、巧まずしておのずから胸中よりほとばしりでた感じですゆえ、思わずギクリ、なぜかいつものように笑えず、おろおろわびしく……(中略)「これじゃ駄目だろうね、どうもいけないと思うんだがね、やっぱり駄目かね」と丸っきり自信を失い、恐る恐るノートを差出しましたら、かの友、ちらと目をそそいで、それから口辺に実に優しい微笑、天使の微笑、慈母の口元……

まるで私の古日記を引用しているみたいだ。つづけて、北や私より二歳年上の阪田寛夫のを写してみよう。太宰が自殺した翌年の昭和二十四年に二十四歳の文学青年だった自分について語っている。

相変らず臆病で、とても死ぬ勇気はないのだが、あいつは自殺しそうな人間だと言われ

たことが自尊心を満足させた。私は少女歌劇の舞台を見る気持で、自分が死んだあとのことを美しく空想した。こんな風に書きつけると、太宰治の小説の調子を下手に真似ている気がしてくる。（中略）読者の側の勝手な事情から言えば、太宰の小説は何より弱い心と自己愛の支えになるところが魅力であった。我々はこの世の俗物にさんざんいためつけられている被害者であり、被害者こそが美しく、また貴いのであると、作家が小説を通して保証してくれているように見えた。「義のために」という言葉の使い方などは、たまらないほどの魅力とおいしさがあった。（中略）私は夜中に目覚めて恐ろしさにキャッと叫びたくなる。（「太宰の時代」）

この阪田の心の揺れ動きも、また、当時の傷つきやすかった私とそっくりである。

いまの北と阪田、そして私は、それぞれの精神と知識と生理と体験からまとめあげた固有の思想と文体を持っているといってよいだろう。しかし、青春時代の太宰について回想するとき、殆ど同じように語っている。無署名だったら、三人のうちの誰がどの文章を書いたか分らないほどだ。つまり、若き日の一時期、私たちは、太宰という器の中で純粋培養されたことになる。

いまの年若い文学好きの読者の中にも、太宰に傾倒しているものが多いと聞く。彼等もまた、かつての私たちのように太宰ファンであることに多少のうしろめたさを感じながら、日用の糧

にしているのではなかろうか。だとしたら、時代は大きく移り変ったが、若者の精神構造は変っていないことになる。むろん、当時もいまも、太宰好きの青少年は、アウトサイダーであり、甘いニヒリストであり、一般的常識社会から見れば異端者である。

さて、私たちは、やがてそろって太宰とお別れする。乳離れしたようなものである。

北は素っ気なく綴っている。

> まもなく彼から離れ、彼が死んだ日の日記には、「太宰が死んで愉快だ」という意味を書いている。しかし、その悪しき心理的影響はもう少しあとまで残った。いま言えることは、いつまでも彼の亜流である人間に、これといった人物が現われたのを見たことがないことである。こういうことを書くと、「太宰の苦悩がお前なんかにわかるものか」という声が聞えてくるようだが、その声にしろ、すでにまったく鼻もちならない。

この文章が書かれたのは、昭和四十二年であるから、北が「不惑」になった年である。もし彼が四十歳のときでなく、三十歳のときだったら、恐らく「その悪しき影響」は依然として残っていて、太宰という悪女の深情からまだ脱け出せないと記したであろう。なぜなら、斎藤宗吉（北の本名）が作家北杜夫としてはっきり存在するようになったのは、昭和三十五年に発表さ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com